

ない国に戻り、話したくない言語を無理に話した。両親から母国であるペルーへの帰国理由を聞かされたが、かれ自身納得が出来なかった。かれは、自分自身で決断できない悔しさがあった、と説明をした。

進路について聞くと、親は日本語能力を活かせる通訳・翻訳業、観光業の分野への進路を希望していた。しかし、親は、卒業まで残り半年という時期に、その分野での勉強が出来る大学や専門学校を知らなかったのである。ペルーでの進学に関する情報を知らなかったため、メールで情報提供をしたところ、予想外にも返信をくれた。大学入試に向けて生徒のスペイン語能力に不安を抱えながらも、半ば納得した様子で情報提供した大学のHPを調べると述べていた。この出来事から3週間後、同国リマ市で合流したHANDSプロジェクトの田巻教授と若林准教授が某日系人学校を訪れ、本人と話をすることが出来た。かれは、意外にも素直に打ち解けている感じであった。

今年、リマ市で継続の「2013 春調査」を実施した際、日秘文化会館を訪問し偶然にもエレベーターでかれと再会した。約1年半ぶりのことであった。眼鏡をかけ、元気な声で呼び止められ、挨拶をされた。正直、嬉しい出来事であった。その場でかれと15分程度雑談をすることが出来た。日系人学校卒業後、薦めた大学の情報学部に進学し、現在無事に2年生であること、また、

日秘文化会館で日本語教師の資格を取得するために養成講座を受講していることを話してくれた。

高校時代の他の2人の同級生に関しては、残念ながら2人とも卒業後日本に戻り、進学ではなく単純労働者として働いているということがわかった。これを聞いたとき冒頭のあの質問が浮かんできたのである。「かれらが受けてきた教育はかれらの進路選択にどのような影響を与えているのか」と。どうして他の2人は進学せずに日本へ戻ることになったのか。親または学校の支援体制が不十分だったからなのか。それとも、生徒自身のモチベーションが不足していたからなのか。

再会でできたかれは、述べたようにペルーの私立大学の2年生となり、自分の将来に対してポジティブに考えており、自分にも自信を持っていた。そして、次のように語ってくれた。ペルーに帰国してからHANDSプロジェクトのメンバーを含め様々な出会いがあり、話をすることによって「進学」についての刺激をもらい考えさせられた。「ペルーという国は知ると楽しい。いい国です。」と言い切っていた。まだスペイン語能力が不十分でありながらも同級生の協力を得ながら勉強に励んでいるようである。

日本へ戻ると決心した高校時代の同級生の選択、そしてペルーに残って進学の道を歩んでいるかれの選択、その理由や背景について追跡中である。

ブラジルに帰国した子どもの教育事情 (ブラジル調査報告)



宇都宮大学国際学部特任准教授

若林 秀樹

中学校で日本語教室担当教員をしていた12年間のあいだに、私はたくさんの外国につながる子どもとの別れを経験しました。保護者の意思で来日し、再び保護者に連れられ祖国に帰っていく彼らは、彼の地での希望にあふれている子

から、自身の意思に反し泣く泣く帰国する子まで様々でした。別れに際して、もう二度と会うことはないのだろうという寂しい思いも当然ながら、私はいつも「中学の途中で教育制度の違う母国に帰るこの子の将来はどうなるのだろう」

という不安を感じていました。

3月の終わり、私は日本から帰国した子どもの教育事情を調査するために、1週間ほどブラジルに出かけてきました。ブラジルへは1996年10月に内地留学研修の一環として訪れて以来2度目でしたが、実際に外国につながる子どもの教育に携わってからは初めてであり、過去に帰国した生徒達の思い出もあり、出発前から感慨深いものがありました。

今回の訪問はサンパウロ市内に限定し、調査のテーマを大きく3つに絞りました。一つ目は日系人学校の視察、二つ目は日本の小中学校に在籍経験のある元児童生徒へのインタビュー、三つ目はブラジルに根ざす日系人社会と日本に出稼ぎに来るブラジル人家庭との関係をつかむことでした。報告すべきことはたくさんありますが紙面の都合もあり、ここでは日本の小中学校に在籍経験のある元児童生徒へのインタビューで感じたことを、特にかれらがブラジルに帰国してからの実態に絞って報告します。

サンパウロでは、日系人学校や現地通訳の方々の協力により、計7名から直接話を聞くことが出来ました。

ブラジルに帰国した時の年齢は様々ですが、特に日本で中学校在学中にブラジルに帰国した生徒が、環境の変化に対して最も厳しいものがあつたようです。「日本で生活したい」「友人と別れたくない」などの理由で、保護者の意思に強く反対したのもこの年齢でした。

一方、高等学校在学中に帰国した生徒は、自分の生き方を前向きに考え、環境の変化にもある程度冷静に対処できる場合が多いようです。またインタビューにおいて、「中学校時に帰国した自分は現在もブラジルで生活しているが、帰国時に高校生だった姉はブラジルの高校卒業後すぐに再び日本に行って向こうで働いている」のように、高校時に帰国した生徒の中には、帰国当初から日本への再渡航を心に決め実現しているケースも7人中3人から聞くことが出来ました。

ブラジル帰国後の学校選択による環境の差にも大きな幅があると感じました。都市部には教育内容も充実した日系人学校がありますが一般的には学費が高く、日本で働いた時の蓄えが多少あつ

ても家計には厳しいのが現状のようです。特に近年は、日本の経済不安定による失業などによって帰国を余儀なくされている家庭も増え、帰国当初から厳しい生活を強いられる場合も多いようです。ブラジルでは現地の公立高校の授業料は無料で、転入することは簡単ですが、学習の遅れや言語面でのサポートなどは期待できず、子どもにとってはとても厳しい環境のようです。愛知県から中学時に帰国して公立校に転入した女子生徒が、「学校が辛くて半年くらいは毎日母と泣いて過ごした」と語っていたのが印象的でした。

ブラジルでの教育環境だけでなく、日本の学校についての意見も聞くことが出来ました。日本では自宅から離れたブラジル人学校にわざわざ通っていたという女子生徒と母親からは、「近くの公立中学校に行きたかったが、イジメや体罰の話を聞くと怖くて決心が付かなかった」という意見を聞きました。イジメや体罰の事実にかかわらず、言語や習慣の違う外国人の目に日本の学校がどう見えているのか、考える事の大切さをあらためて感じました。

訪問中の土曜日は、日系人学校・大志万学園の運動会を見学する機会に恵まれました。グラウンドの中央には青空に向けて大きな柱が組まれ、そこには何匹もの鯉のぼりが初秋の風に吹かれていました(写真)。地球の反対側でこのような時間が流れていることに、素直に感動することが出来ました。ブラジルには今年度中もう一度訪問する予定です。次回は日系人の多く居住する地方都市にも足を伸ばし、地域による教育事情の違いも探りたいと考えています。



(日系人学校・大志万学園の運動会会場にたなびく鯉のぼり)